



Title	モンゴル国におけるタルバガン・マーモットの再導入に関する映像資料について
Author(s)	ラマー, ジャルガルサイハン
Citation	モンゴル研究. 2022, 31, p. 24-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102421
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《資料紹介》

モンゴル国におけるタルバガン・マーモットの 再導入に関する映像資料について

ジャルガルサイハン・ラマー

1. はじめに

中央アジアに広く生息するマーモットについて、モンゴル人は「タルバガ」(以下、タルバガンと表記する)と呼び¹⁾、毛皮を衣類に、肉や内臓を食糧や医薬などに利用してきた。19世紀後半以降、その毛皮は商業上の需要が高まり、捕獲数の増大によって個体数の減少が急速に進んだ。モンゴル国においては、国際自然保護連合(以下、IUCNと表記する)が絶滅危惧哺乳類動物に認定するほどである。

こうした状況に対して、モンゴル国内外の自然保護団体は、タルバガンの減少による草原の生態系の破壊を指摘している(大黒ら2015: 57-63)。例えば、①タルバガンの巣穴を介した土中と地表の栄養循環が止まり、植物の成長の鈍化や分布の偏りが生じる、②大型肉食動物の減少を招くほか、タルバガンに代わる捕食対象として家畜の被害が生じるなど、牧畜業への重大な影響が挙げている。

それゆえ、モンゴル国政府は2005年にタルバガンの捕獲や売買を法律で禁止すると共に、タルバガンの生態系に対する役割を評価して(Улсын их хурлын тогтоол дугаар 03: 2005)、個体数の減少または絶滅した地域への再導入(Re-introduction)²⁾に着手し、個体数の増加などの成果を報告³⁾している。管見の限り2008年から2022年までに30数件の実施が確認されるが、個々の事業の実施プロセスや実施後のモニタリングに関する報告や研究は極めて少ない。加えて、モンゴル国政府はタルバガンの再導入事業の評価ポイントとして、個体数の増減など数でのコントロールを重視しており、筆者は、タルバガンを受け渡す行為だけに満足しているのではないかと懸念する。

そこで、タルバガンの再導入はどのような過程を経て、実施され、どのようなステークホルダーが関係しているのかを把握する手がかりとして、本稿で詳しく取り上げる映像資料を通じて、考察を深めたい。

1) モンゴル高原には、シベリア・マーモット(学名: *Marmota sibirica*)、アルタイ・マーモット(学名: *Marmota baibacina*)の2種が生息する。「タルバガン(tarbagán)」という呼称は、19世紀後半から20世紀前半にかけて国際的に生じたマーモットの毛皮の需要の増加に伴って様々な言語に定着するようになった。ロシア人が「タルバガン・マーモット」と呼び、それがヨーロッパ、日本へ伝わった。背景には、その毛皮の経済的な価値をめぐる人間の活動、ペスト菌の流行など、マーモットに関する歴史的な経過が深く絡んでいるため、本稿において「タルバガン」と表記することとする。また、便宜的にアルタイ・マーモットのことをアルタイ・タルバガン、シベリア・マーモットのことをシベリア・タルバガンと表記する。

2) IUCN(2014:6)の定義では、「ある地域から別の地域へ生物を意図的に移動させ放すこと」である。モンゴル国における定義について、野生動物法の第4章、第8章には、「絶滅または絶滅の危機に瀕している種を、過去に生息していた地域に再び定着させることを試みること」と定めている。モンゴル語では、Сэргээн нутагшүүлахである。

3) 一例として、環境・観光大臣のL. ガンスヘは環境観光部門の幹部委員会(2011年2月15日)で、「(バヤンホンゴル県内の再導入事業について)再導入した13匹のタルバガンは30匹あまりに増えており、住民で構成された環境保護友好会が保護を担っている」と述べている。

本稿で紹介する映像資料「タルバガンの再導入事業の報告」(“Тарвага сэргээн нутагшуулсан ажлын тайлан”)は、タルバガンの捕獲・移送・放出に関する技術的な作業に加え、捕獲地と放出地の地域代表者や作業受託者の発言が収録されており、再導入事業をめぐるステークホルダーの関係性や思いを窺い知る上で、重要な資料である。

そこで、本稿では、モンゴル語によるナレーションや発言を日本語に翻訳すると共に、詳細な注釈を付することでタルバガンの再導入の実態を把握する一助としたい。

2. 映像資料が対象にしている再導入事業の概要及び背景

この映像資料は、2017年7月にバヤンホンゴル県ジャルガラント郡(以下、捕獲地と表記する)からトウブ県デルゲルハーン郡(以下、放出地と表記する)へ50匹のタルバガン(オス25匹、メス25匹)を再導入した事業の記録である。内容は、タルバガンを捕獲してから放送出するまでにかかった14日間(2017年7月18日～2017年7月31日)の記録を31分にまとめたものだ。



図1 捕獲地及び放出地

まず、今回のタルバガンの再導入に携わる行政及び関係者の間で交わされた公文書、依頼書など実施に至った経緯について触れる。

放出地における実施体制については、タルバガンの再導入の実施をモンゴル国狩猟研究会⁴⁾、モンゴル国狩猟者協会⁵⁾、ゼレグレー社⁶⁾に受託している(Төв аймгийн Дэлгэрхaan сумын засаг дарга № 01/194:2017、Зэрэглээ ХХК захирал № А/08:2017)。ゼレグレー社は、タルバガンを放す区域として選ばれたトウブ県デルゲルハーン郡オガルザ・タルマツアグ山脈狩猟解禁地区(агнуурын бүс нутаг)⁷⁾のマネジメント担当者⁸⁾でもある。それぞれの役割分担としては、モンゴル国狩猟者協会は捕獲地とのやり取り及びタルバガンの捕獲、モンゴル国狩猟研究会は環境・観光省とのやり取り及び放出後のモニタリング、ゼレグレー社は費用負担などである。これらの体制はどのようにタルバガンの捕獲許可を得たのか詳細にみてみよう。

2017年初頭ごろ、放出地はモンゴル環境・観光省周辺環境・自然資源管理署にタルバガンの再導入を行うに当たって、タルバガンの提供先を申請したという。当初はアルタイ・タルバガンを希望したことが放出地の受託者であるモンゴル国狩猟者協会会長のD.ゲレル氏への取材から分かった。

「トウブ県の4つの郡から申請書を受け取った。タルバガンがいなくなった区域に再導入を希望している。私たちは利益を求めずに協力するという立場だ。まずは、デルゲルハーン郡にタルバガンの再導入を行う準備をしており、バヤンホンゴル県ジャルガラント郡から50匹のタルバガンを受け取る予定で、手続きに入っている。さらに、医動物学研究所⁹⁾の協力を得て、ペスト菌の検査もする予定だ。実施する時期として春を予定していたが、捕獲地が決まらず延長された。

バヤンウルギー県からアルタイ・タルバガンを再導入する希望だったが、環境・観光省の許可が得られなかった。国際的な分類では、アルタイ・タルバガンとシベリア・タルバガンの2種

-
- 4) モンゴル国狩猟研究会(2016年設立)は、モンゴル生命科学大学の教員たちが中心メンバーとなっている。主な活動内容は、野生の動物資源の捕獲、個体数に関する調査、再導入及び繁殖、動物を用いた研究実験などである。
- 5) モンゴル国狩猟者協会(2008年設立)は、モンゴル国政府による野生の動物資源の管理やその施策に不満を持つ狩猟者らによって設立された。活動費は会員により集められ、一億三千万トゥグルグ(2021年9月11日の為替レート:1円=25トゥグルグ、5,900,000円)の資金をたてたという。活動の目的は、野生の動物資源の持続的な利用とその推進である。野生動物から得たれる利益の一部を地域に還元し、環境保護に貢献すべきだという立場を示す。設立に至った経緯としては、当時、モンゴル国政府は9年間に渡って野生動物の個体数の調査を行わなかった他、国内外からの狩猟者が自由に狩猟していた。それに対してモンゴル国狩猟者協会は、野生動物の個体数を把握した上で、捕獲する数を決めるべきであることを主たる行政機関に訴えてきた。その結果、野生のヒツジが生息する4つの県が調査され、年間捕獲できる野生のヒツジは20匹だという結論に至ったことが分かった。(当時は年間50-60匹の野生のヒツジを環境・観光省の許可で捕獲させていた)。
- 6) ゼレグレー社は外国人の狩猟者をもてなす営業をする。モンゴル国狩猟者協会の会員であり、放出地における狩猟解禁地区的マネジメントを担当している。
- 7) 野生動物法(第4条1項9号)は、狩猟解禁地区について、野生動物資源の持続的な利用及び保全を目的とする、野生動物の分布・生息地と定めている。
- 8) 野生動物法(第4条1項11号)は、狩猟マネジメント計画について、該当する地方自治体の狩猟解禁地区における野生動物資源の保全及び持続的な利用、または個体数の増加に向けた狩猟活動の実施を段階的に計画した文書と定めている。
- 9) 野生動物及び家畜から人間に感染する伝染病に関わるすべての業務を行う機関である。首都のウランバートル市には本部があり、14県に分所がある。モンゴル国では「ゴツ」(гоц)という名で一般人に知られている。1931年7月10日のモンゴル人民共和国の大臣委員会の決定により、「ペスト菌ラボラトリー」(Тарваган тахал эсэргүүцэх лаборатори)という名で設立された。その後、活動の規模拡大などにより5回にわたり名前を変えている。1940年には、「ペスト菌中央局」(Тарваган тахал эсэргүүцэх төв станци)、1961年には、「危険な感染症研究所」(Гоц аюулт халдварт өвчинийг эсэргүүцэн судлах газар)、1990年には、「動物由来感染症研究所」(Байгалийн голомтот халдварт өвчинийг эсэргүүцэн судлах төв)、2006年には、「国立動物由来感染症研究センター」(Байгалийн голомтот халдварт өвчин судлалын үндэсний төв)、2012年以降は、「国立医動物学研究所」(Зоонозын өвчин судлалын үндэсний төв)である。

として登録されているようで、アルタイ・タルバガンに関しては生息地の経度、緯度まで登録されているため、別の地域に移すことができないということだった。バヤンホンゴル県はタルバガンの個体数が比較的に多いというデータがあるからだ。費用としては800万～1000万トゥグルグ¹⁰⁾ かかる見込みだ (Мэсс.мн, Гэрэл. Д 2017)。」

このように放出地は環境・観光省及び受託者との間での話をある程度すすめた上で、捕獲地に対して申請書を送っていることがわかる。

環境・観光省はアルタイ・タルバガンの再導入を許可しなかったが、別のところを提案したようだ。放出地の受託者であるモンゴル国狩猟者協会の会長である D. ゲレル氏は環境・観光省の方からバヤンホンゴル県はタルバガンの個体数が比較的に多いので、バヤンホンゴル県を捕獲地として検討するよう薦められたという。その薦めを受け、モンゴル国狩猟者協会はバヤンホンゴル県医動物学研究所宛てに願い書(2017年の5月9日)を送っている。願い書に以下のように書かれている。

「[中略] バヤンホンゴル県のどの郡のどの区域からタルバガンを捕獲してよいか回答していただけませんか。

許可していただいた郡長宛てに願い書を送り、貴研究所の管理の下で捕獲を実施し、トウブ県デルゲルハーン郡の第1バガ(村)ボダントグルワンオポートの区域に再導します。放出後のモニタリングなどに関する研究を2年間担当し、取り組む中でトウブ県の医動物学研究所の協力を得ると共にその報告を毎年提出いたします。(Монголын мэргэжлийн анчдын холбооны тэргүүн № A/24:2017)」

医動物学研究所からの回答を入手できていないが、医動物学研究所の研究員の N 氏によれば、ウルズィート郡¹¹⁾か、ジャルガラント郡かどちらかを検討していたという¹²⁾。

2017年5月11日にモンゴル国狩猟者協会からジャルガラント郡長宛てに許可願いを送っており、その主な内容は「バヤンホンゴル県医動物学研究所の監視の下で実行してよいか」である (Монголын мэргэжлийн анчдын холбооны тэргүүн № A/25:2017)。ジャルガラント郡長の返事が約1ヶ月後に(2017年6月7日)あったことから、捕獲地はタルバガンを捕獲させる決断に至るまでかなり時間をかけ、検討したと思われる。返事の中で郡長の D. サインビレグ氏¹³⁾は次のように述べている。

「当郡から 50～60 匹のタルバガンを捕獲し、再導入する要望を受領しました。中央政府の関係機関から得られた許可の範囲の中で、個体数及び群れの構造を研究しながら、かつ医動物学研究所の監督の下で捕獲を実行していただきたい。(Баянхонгор аймгийн Жаргалант сумын засаг дарга № 1а/80:2017)」

ここで言われている中央政府の関係機関はおそらく環境・観光省のことを指していると思われる。

10) 2021年9月21日の為替レート(1円=25トゥグルグ)で計算すると、400,000円になる。

11) ウルズィート郡の場合はペスト流行地であることから、選ばれなかつ可能性が高いと思われる。

12) 筆者によるインタビュー調査: 2019年3月4日バヤンホンゴル市。

13) ジャルガラント郡長(2012年～2020年10月)の D. サインビレグ氏はモンゴル相撲の力士であり、馬の調教師でもある。

環境・観光省からは正式な許可が出ていないが、了解レベルでのやり取りがあったことが映像資料で確認できる。捕獲地の、「環境・観光省の了解で実行する事業なので、規則を守ってちゃんとやってほしい」という返事には、ある意味仕方なく受け入れた様子が伺われる。

こうした捕獲地からの返信を受け放出地は中央政府の関係機関に許可申請書を出した経緯が分かる。2017年7月3日、モンゴル国環境・観光省周辺環境・自然資源管理署長からモンゴル国狩猟研究会にバヤンホンゴル県ジャルガラント郡から50匹のタルバガンを捕獲し、再導入する許可を出した。許可書には、実施に当たって従うべき法律、規則を示しており(Монгол Улсын Байгаль Орчин, Аялал Жуулчлалын яам Хүрээлэн буй орчин, байгалийн нөөцийн удирдлагын газрын дарга № 06/4152:2017)、捕獲地側を安心させる役目も果たしていると思われる。

捕獲地と放出地は意気投合してタルバガンの再導入に取り組んだとは言えない。放出地が捕獲地になる相手はどこでも良く、タルバガンを捕獲し、再導入を実施することが最終的なゴールである。捕獲地の行動は紆余曲折がありながら、とにかく決断が早く、焦りが見られる。

一方で、捕獲地に対して見返りがあったことが関係者に対する聞き取り調査で明らかになったが、具体的な金額については把握できていない。加えて、後述するように映像資料では、タルバガンの捕獲に協力した捕獲地の住民に対して、報償を渡したことがわかる。

次の節では、タルバガンの再導入の実態に関する映像資料の概要及び内容について紹介することしたい。

3. 映像資料

3.1 映像資料について

撮影・編集はモンゴル国狩猟研究会、モンゴル国狩猟者協会、ハンガルスタジオ¹⁴⁾によってされており、費用はゼレグレー社が全額負担¹⁵⁾した。加えて、この映像資料は、捕獲地の関係者ら及び住民に向けて作成されたという。こうした映像資料は他の事例では、管見の限り3件ほど確認されるが、いずれもナレーションによる説明のない技術的な作業記録、もしくはニュース報道に過ぎない。従って、この事例を詳細に分析することがタルバガンの再導入の実態を把握する手がかりとして意義が大きい、第一級の資料とも言える。

3.2 映像資料とその内容

映像資料の音声をテキストにし、注釈にて補足する形で紹介したい。特に語り手を特定しない場合は、ナレーター(D. ゲレル氏¹⁶⁾)を指す。また、〔 〕には、筆者による補足情報を加える。

14) モンゴル国民営テレビ局の1つであるTV25所属のスタジオだ。

15) 筆者によるインタビュー調査(ゼレグレー社の関係者M氏、2021年9月21日オンラインにて)の結果:全額1800万トゥグルグ(2021年9月11日の為替レート:1円=25トゥグルグ)78万円の費用がかかったことが分かった。

16) 今回の映像資料において、D. ホルツァー氏と呼ばれているが、本名はD. ゲレル氏(1954年～)で、D. ホルツァー氏は通名である(モンゴルでは、本名と異なる通名を日常的に使うことはよくある)。彼はモンゴル国ザブハン県アルダルハーン郡出身で、3世代世襲の狩猟者である。現在はモンゴル国狩猟者協会会長を務める他、モンゴル国環境市民委員会の委員でもある。D. ゲレル氏はモンゴル国政府により「筆頭の狩猟者」(Улсын тэргүүний анчин)勲章を受けており、命をいただくという重荷を常に自覚し、野生動物及び環境保全活動を発案し、積極的に参加してきた人物でもある。彼は、3年間の兵役を終えた年である1975年に狩猟者になったという。また、金属工芸を兼業とし、モンゴル国内では、五本の指に入る実力者でもある。

場面1 (0:00-0:14) タイトル

「タルバガンの再導入事業の報告」(Тарвага сэргээн нутагшуулсан ажлын тайлан)

場面2 (0:15-0:47) [捕獲地の郡役場における協議]

私たち [2017年7月] 18日に、環境監視員¹⁷⁾ 及び郡長らと会談し、どの辺りに行くか、どのぐらいの期間で滞在するかと言った細かい計画を立てている様子である。

ゼレグレー社は環境保護事業の支援として50万トゥグルグ¹⁸⁾ を [捕獲地の郡役場に対して] に寄付した。

場面3 (0:47-1:12) [捕獲地における宿营地の確認]

道を進み、目的地であるエゲ峠¹⁹⁾ のふもとに着き宿营地を選び、環境監視員 [D. ダルハ一氏²⁰⁾] の説明を聞いた。

彼は [D. ダルハ一] タルバガンの生息密度の状況を教えてくれた。私たちは [放出地の受託者] 地元の住民ではないので、タルバガンの生息密度の現状をよく分からなかった。

場面4 (1:12-2:05) [捕獲地の協力者(住民)との面談]

この方は3世代世襲の狩猟者であるプレブ氏²¹⁾だ。彼の家に訪問し、ここで環境監視員と面談し、[D. ダルハ一氏による] 指示を受けた。プレブ氏は頼りになる人物であるため、彼 [プレブ氏] を紹介してくれた。環境監視員 [D. ダルハ一氏] はプレブ氏に今回の仕事に関する書類などを全部見せ、協力するように頼んだ。

彼ら [捕獲地の協力者(住民)] から学び得ることは環境保護を徹底しており、住民も [タルバガンを] 勝手に獲ろうとしない点である。普段タルバガンの肉が好きで、タルバガンの丸焼き²²⁾ を食べたいのであれば²³⁾、みんな守るべきであるという理解を住民に一層広めていると理解することができる。

17) モンゴル国自然環境保護法の第5章第28条では、環境監視員の義務について、該当地域におけるあらゆる環境被害を防ぎ、環境資源を守ることと定めている。また、29条では、環境監視員、環境保護員は業務用に武器を携帯することが認められている。

18) 2021年9月11日の為替レート (1円=25トゥグルグ) で計算すると、20,000円になる。

19) 捕獲地における標高2200mの峠道である。アルハンガイ県チョロート郡との境にある。

20) 捕獲地の環境監視員のD. ダルハ一氏(1959年～)は、1977年にジャルガラント郡の環境保護員(環境監視員の指示の下で働く)として就職し、その後1994年に当郡の環境監視員になり、2020年11月に定年退職するまで働いた。彼は現職の時、地域住民に呼びかけ鉱物資源の発掘反対運動、植林活動などを行ってきたと回想した。また、今現在も環境保護を目的とする活動を続けているという。以前から副業として農業に携わっており、およそ800本のチャチャルガン(サジー)の木、ウヘリーンヌデ(クロスグリ)の木を植えているという。その他、住民による環境保護友好会(注41を参照)の立ち上げの準備を進めている最中である。D. ダルハ一氏は1983年にモンゴル人民共和国政府から「労働勲章(хөдөлмөрийн хүндэт медаль)」を受けている。

21) プレブ氏は捕獲地の第3地区(バガ)の遊牧民である。ナレーターのD. ゲレル氏と同様に3世代世襲の狩猟者である。地域の野生動物の分布状況などに詳しい人物の1人である。

22) タルバガンの料理の1つである。タルバガンの毛を焼いた皮の中にタルバガンの肉を熱くした石と共に煮込む料理だ。モンゴル人の好きな料理の1つである。

23) モンゴル国環境・観光省、モンゴル国科学アカデミー生態学研究所の関係者はマーモットの再導入事業の目的を公的な場において説明する際に、種の保全さらに環境保全のためというが、実際の現場の人々に浸透していない状況である。

場面5 (2:05-3:33) [宿营地における捕獲地の住民との交流]

ハダタ・トルゴイ²⁴⁾ という丘のふもとをマーモット捕獲の作業拠点にしている様子である。

今回の事業に関わりのある各グループを集めた。[環境保護]友好会²⁵⁾のメンバーら及び動画に映っている住民たちは私たちに協力するために来た。環境監視員[D. ダルハ一氏]の指示を受けここに集合した様子である。一般的に、地元の住民をこのような事業に参加させることができ野生動物の保護さらに再導入事業に対する理解を一層広めることにつながった。

この方の名前はバーサンジャブ氏²⁶⁾である。私[ナレーター D. ゲレル氏]と同世代だ。彼は社会主義時代の苦楽を共にし、[狩猟専門]隊長を務めてノルマの達成に励んでいた²⁷⁾、豊かな経験の持ち主であり、モンゴル人民共和国の「筆頭の狩猟者」でもある。当時、私たちは狩猟をし、ノルマを達成していた。現在タルバガンを捕獲し、別の地域に放送出する再導入事業に取り組んでいるが、経験を活かし、私たちはそれぞれ次世代に伝えたい、言い残したいと思っていた。

場面6 (3:33-4:03) [タルバガンの目隠し]

野生动物を捕獲した後で、その動物がストレスを感じ、不安定であると判断した場合に目隠し²⁸⁾をする。[タルバガンを]金属製の檻に入れてから4、5時間経ったら目隠しを外す。しばらくしたら人間に慣れ、叱っているような鳴き声を出す。人間に慣れる前にストレスを感じている時に目隠しをする。

24) 注19を参照。

25) モンゴル国環境・観光省大臣命令 A-250第1附属書(2010年)「特定の自然資源の保護・管理及びその利用、所有を共有する住民による友好会の規則」第2条では、友好会の設立について次のように定められている。

2.1 住民は生活基盤地(郡、区)における特定の自然資源を保護・管理し適切に利用、所有するために友好会をモンゴル国民法第478、481章(共同活動に関する章)に基づき設立する。

2.2 友好会の会員同士は共同活動を行うに伴い契約を結ぶ。契約書には友好会の名称、住所、正式な様式、印鑑、所有財源とその種類、数及び銀行口座、所有財源の利用、入会、退会に関する規則、会員の権利、義務、友好会の会議で決める課題、会長の選任に関する規則、友好会の活動、解散などを示す。

2.3 友好会の会員数は10人以上である。友好会会长は全会員による協議に基づき、該当地域の住民を会員として受け入れることができる。

2.4 友好会の担当する地域の規模は、友好会の会員数、余裕、自然資源の分布状況、地理的及び生態系の特徴を基に定める。友好会の会員1人につき500ヘクタール以下の面積となる。

26) バーサンジャブ氏(1954～)は捕獲地の第3地区(バガ)の遊牧民である。現在は遊牧民であるが、若い時は狩猟者だった。ナレーターのD. ゲレル氏と同様にモンゴル国政府より「筆頭の狩猟者」の勲章を受けている。地域の野生动物の分布状況などがよくわかる人物の1人である。

27) モンゴル人民共和国では、農牧業協同組合(ネグデル)による狩猟事業が行われた。政府は狩猟する野生动物の種類、頭数を年ごとに定め、狩猟者たちがノルマを達成することに専任した。

28) D. ゲレル氏によれば、これまでに全国で行われたタルバガンの再導入では、目隠しをしたことがないという。



写真1 目隠しの様子

出典：映像記録資料 3分41秒より

場面7（4:03-4:32）【タルバガンのノミ駆除】

この方はアドバイザーのハダバートル氏²⁹⁾であり、タルバガンのノミを駆除³⁰⁾している。タルバガンのノミ駆除作業〔ノミ駆除スプレーをかける〕というのはこれである。アドバイザーのハダバートル氏のおかげでタルバガンのノミ駆除作業を行うべきであることを理解した、今後頭に入れておくべきである。



写真2 ノミ駆除の様子

出典：映像記録資料 4分05秒より

場面8（4:32-4:55）【タルバガンの捕獲方法】

タルバガンの巣穴に、針金の輪を先端に取り付けた棒を差しこみ、タルバガンの頭部を針金の

29) ハダバートル氏はトゥブ県出身で医師である。今回のタルバガンの再導入では、アドバイザーとして携わった。

30) 今回はアドバイザーのハダバートルの助言を受け、ノミ駆除をしたという。ノミがペスト菌を媒体することが重視されてしまったともいえる。

輪にくぐらせ、その状態で棒(以下、生け捕り器具とする)³¹⁾を巣穴から引き抜くことで、タルバガンを生け捕る方法である。これは、性別の確認をしている様子だ。オス・メスそれぞれ何匹を捕獲するかを考えなければならない。

タルバガンの巣穴の付近に、先端に旗を付けた約50cmの棒(以下、目印棒とする)を寝かせた状態で仕掛けておき、その旗付きの棒が立ったことを目印とし捕獲員がタルバガン生け捕り器具を持って、巣穴の方へ行きタルバガンを捕獲している様子が映っている。

場面9（4:55-5:49）【捕獲したタルバガンの保管】

タルバガンが「捕獲されてから」数時間後に、人間の声でびっくりしなくなり、慣れてきた。タルバガンを入れた金属製の檻に草を入れる理由としては、第1にタルバガンに影を作つてあげるため、第2にタルバガンの目隠しを外した後、草の下に入って隠れる環境を整えるためである。その様子が映っている。

一般に金属製の檻を選ぶ際に、質の良いものにしないと壊れる可能性が高い。私たち〔放出地側〕が持って行った金属製の檻は割と丈夫だった。破損はほぼなかった。ただ、間仕切り用の鉄格子が破損したことによって、檻の中で分けていたタルバガンが混ざったことが1、2回あった。金属製の檻の角を繋ぐ部分が少し弱かった点もあった。

場面10（5:49-6:09）【捕獲地の住民による協力】

地元の住民らは私たち〔放出地の受託者〕の移動をバイク³²⁾で助けてしてくれた。私たちは彼ら〔住民〕のバイクにガソリンを入れ、スタッフにタルバガン生け捕り器具、目印棒を持たせ、一緒に行かせた時の様子が映っている。一般に地元の住民を一層参加させることは、「その事業の意義」を理解させる効果がある。

場面11（6:09-7:02）【昼休憩の様子】

この子はとても良い子だった。私たちにミルク、馬乳酒、ウルム(牛乳などの表面凝固した薄い乳油)を持って来た時の様子だ。プレブ氏の息子³³⁾で、名前はドルジゾドブと言う。将来、非常に良い狩猟者になることが期待される。彼は動物を見る目があり、タルバガンの年齢・性別を区別することができていた。

地元の住民たちと意見交換をしながら昼食を食べている様子だ。奥にいるのはアドバイザーのハダバートル氏である。

31) タルバガンの巣穴に、針金の輪を先端に取り付けた棒を差し込み、タルバガンの頭部を針金の輪にくぐらせ、その状態で棒を巣穴から引き抜くことで、タルバGANを生け捕る器具である。モンゴル語は(アミドバリグチ)“амьд баригч”である。手製で、昔から使われていたふしがある。

32) 近年、モンゴル国では、バイクが馬に代わる乗り物として人気がある。中にはバイクで家畜の放牧に行く人もいる。

33) ドルジゾドブ氏は捕獲地の協力者の1人であるプレブ氏(注21を参照)の息子だ。当時は小学校3年生だった。彼は、子どもにしてタルバGANの年齢性別を区別することができると言われており、普段タルバGANと近い関係にあることと思われる。

場面 12 (7:02-7:26) [環境保護員による監視]

チョロート郡[アルハンガイ県]の環境保護員であるガンプレブ氏³⁴⁾が来た。彼[ガンプレブ氏]を褒めたい点があった。その理由としては私たち[放出地の受託者]の作業を確認しに来てくれたことだ。それこそが環境監視員の任務だ。

私たちは[放出地の受託者]環境監視を徹底していた。走行する自動車などが現れたら、その様子を双眼鏡で観察していた。

場面 13 (7:26-8:01) [タルバガンの捕獲などの様子]

バーサンジャブ氏は若者たちを指導し、よく教えた。普段から、経験のある我々が次世代に教えないところの作業は簡単なものではない。事故、まちがってタルバガンに噛まれないようにすることが大事であることを住民に理解してもらった。

以前、住民たちは狩猟してタルバガンを丸焼きにしていたが、生きた状態で捕獲し礼金を受け取る³⁵⁾ことを通じて、タルバガンに対する考え方を改めるチャンスを得られたと考えている。

目印棒が風で立ってしまうことがあった。

網で捕獲している。

場面 14 (8:24-8:54) [タルバガンの目隠しについて]

以前はタルバガンを捕獲する時目隠しをしなかった[ナレーター D. ゲレル氏]。今回は、以前の失敗から学び、繰り返さないようにした。動物のことも尊重するべきだし、動物を捕獲する際のマナーというものがある。そのマナーを守るべきであることをこれから人々に伝えることが大事だ。

場面 15 (8:54-9:47) [捕獲地での過ごし方]

最終的にタルバガンは人間に慣れてきて、人間に対して鳴くようになった。

ここに[捕獲地]宿営してから毎日雨が降った。日が沈むと風が吹いてくる。「雨の前は砂(борооны өмнө шороо)³⁶⁾」と言われている通り風が来た後雨が降り、風がおさまっていた。いつも雨で、5、6日間、毎日雨が降ったように思う。雨が降る前に慌てている時の様子が映っている。

場面 16 (9:47-11:07) [宿営地を選ぶ際の注意点]

岩のふもとを選び、ハダタ・トルゴイという丘を宿営地にしたのは、タルバガンが暑気に当たることを防止するためである。経験のある年寄りがタルバガンは暑気に当たると脂肪が原因ですぐ死んでしまうと言つてくれたことを思い出し、岩のふもと辺を選んだ。そのおかげで、タルバガンが死ぬことなく無事に進んだ。

草の生え具合はエグ峰のふもと辺では良かった。ここに来る途中に草の生え具合の悪い所が見

34) 捕獲地はアルハンガイ県チョロート郡と接している。ガンプレブ氏はチョロート郡の環境監視員である。環境監視員は県をまたいで広域的に連携しているらしい。

35) 動物はそのものの価値があるから守られるのではなく人間に価値(利益)をもたらすから守られると言える。これこそが野生動物の保護活動に直面するアリズムであり、どの時代にもある話だと思われる。

36) モンゴルでは、雨の前は砂(Борооны өмнө шороо)という決まり文句は日常的によく使われる。

られていた。[バヤンホンゴル県] ガルート郡からここまで間は特に悪かった。ガルート郡に宿営する時、金属製の檻を2つ無くしてしまい、持っていた針金で檻を作った。

岩の陰に入れていたことがタルバガンにとって非常に効果的だったことを重視すべきだ。今後タルバガンを捕獲する者が必ずこころえておくべきことは日陰に置き、霧状の水をかけてあげるということだ。



写真3 保管の様子

出典：バヤンホンゴル県医動物学研究所による提供

場面 17 (11:07-11:38) [ペスト菌の検査]

いつ、どこで、誰が捕獲したタルバガンなのかをはっきりさせるため、捕獲した人物名・場所・期間を記入した紙を檻に貼った。ペスト菌の検査³⁷⁾をするに当たって、どこの巣穴から捕獲したかをはっきりとわかるようにすべきだという指示を国立医動物学研究所から受けた。

場面 18 (11:38-15:22) [捕獲地の環境監視員による挨拶]

D. ダルハ一氏³⁸⁾ (バヤンホンゴル県ジャルガラント郡環境監視員)

この動画をご覧の皆さんに挨拶を申し上げる。

今年の3月末4月頭ごろにトウブ県のデルゲルハーン郡から同郡のオガルザト・ハル地区タラムツアグ山脈³⁹⁾にタルバガンの再導入をしたいという意思を願書で地元に送り、地元の幹部ら環境監視員である我々が会談し受け入れることにした。タルバガンの再導入をつまり捕獲・運搬・放出するなどを法律に基づいて行うため、環境・観光省の主たる機関に相談したことが形になり、

37) モンゴル国の21県の315郡のうち、17県の137郡において、ペスト菌が確認されている。モンゴル国は、全国的にペスト菌の感染リスクが非常に高いため、ペスト菌の検査は重要である。

38) 注20を参照。

39) ハンガイ山脈の延長部にあたる山で標高1570mである。今回のタルバガンの再導入の放出地となる。

本日実施されている。明確な法規定により、バヤンホンゴル県ジャルガラント郡から50匹のタルバガンを捕獲する仕事が行われている。最初に、郡の幹部、環境監視員、環境保護員、モンゴル国環境国民委員会⁴⁰⁾のD.ゲレル氏と言ったメンバーで会談し、エグ峰方面からタルバガンを捕獲する決断に至り、仕事を開始した。私の方からは、狩猟者たちと面談し、仕事の進み具合、捕獲されたタルバガンの様子などを確認し、法律に従って進めているかを監視した。

本日、医動物学研究所の専門家らが来た。捕獲されたタルバガンにペスト菌が保菌されているかを調べている。

タルバガンの再導入事業の実施により、有益な新たな仕事がうまれた。

第1に[ジャルガラント郡のエグ峰]この辺はタルバガンの密度が非常に高い地域であり、再導入を目的に捕獲することによってその密度が低くなる。第2に、タルバガンがいなくなり、その巣穴に誰も生息しなくなった地域に再導入をすることは、動物を保護するためのとても効果的な事業である。第3に、再導入の目的で捕獲するに当たり、医動物学研究所がペスト菌の検査を行った。この辺のペスト状況、菌が保菌されているかどうかについて知ることができ、ある程度の情報を把握できる意義ある事業である。一方で地元の我々はこの事業に参加し、環境保護友好会の大切さを感じたため、地元に友好会⁴¹⁾を開くことにした。タルバガン保護友好会を開くことによってタルバガンを保護するノウハウを身に付ける。さらに、タルバガン保護活動の一環として県境周辺の大きな道路付近に看板を設置し、地元の住民によるタルバガン保護友好会を開き、活動地区をエグ峰にする決断に至った。今から10年前にジャルガラント郡に隣接するアルハンガイ県チョロート郡からゼヴェグ⁴²⁾、ハダラン⁴³⁾、ソーム⁴⁴⁾と言った3種の魚をバイダラグ川⁴⁵⁾、ザグ川⁴⁶⁾、バイダラグ川の源流であるビンデルヤフフ湖⁴⁷⁾に再導入⁴⁸⁾をした。これと同様に今回のタルバガンの再導入事業は国のレベルで実績を残せるように我々は目指している。

場面19（15:22-17:04）【ペスト菌の検査についてナレーションによる説明】

私たち、国立医動物学研究所に申請し、バヤンホンゴル県の医動物学研究所（研究所所長ツェンデ）の専門家らがペスト菌の検査をしに来た。野生動物であるタルバガンを再導入するのはいいが、その動物がかかる病気や保菌する菌などをよく調べ、放出地の地域に病原菌を運ばないよう心掛けるべきであることを過去の経験から学び、今年からは形を作つて行こうと考え医動物学研究所の協力を得た。研究所の協力は意義が大きい。なぜなら、私たちは異分野間の連携が弱い。互いの業務を認め、協力し合つていけば、いい結果につながることを分かっておくべきだ。その上、

40) モンゴル国環境国民委員会NPO（2008年設立）は、全国21県に分会を持っており、2年に1回総会を開く。モンゴル国環境国民委員会の主な活動は、環境保護・保全を目的で活動する人々及びNGO・NPOなどの支援を行っている。

41) 筆者によるインタビューの結果、2021年9月時点では、本格的な活動を開始しておらず、郡議員会に友好会の活動方針を提出し、許可を待つ状況であることが分かった。

42) 学名：*Brachymystax lenok*

43) 学名：*Thymallus brevirostris*

44) 学名：*Silurus asotus*、ソームはロシア語で、モンゴル語はツォルボールトである。

45) ジャルガラント郡を流れる川。

46) 同上

47) ジャルガラント郡にある湖。

48) 再導入された3種の魚は、ゼヴェグ、ハダランが増えたが、ソームは増えなかったという。ゼヴェグ、ハダランが増えたことによって、フィッシングをしに来る人が増え、さらに2017年、2018年に全国フィッシング大会が行われたという。

地元にもメリット〔ペスト菌状況の把握〕があるので、医動物学研究所の協力を得た。捕獲された50匹のタルバガンから血液を採取し検査を行うというのはとても大変で、意義のある作業だ。

場面 20 (17:04-17:28) [バヤンホンゴル県医動物学研究所の専門家による挨拶]

D. ダワーダシ⁴⁹⁾(バヤンホンゴル県医動物学研究所の専門家)

バヤンホンゴル県ジャルガラント郡からタルバガンを捕獲し、トウブ県に再導入する事業に当研究所が協力した。50匹のタルバガンから血液をとり、試験管を国立医動物学研究所の方に送った。ペストの病原菌を保菌しない健康なタルバガンを再導入するという意味で効果的な事業になった。

場面 21 (17:28-18:17) [放出地の受託者による挨拶]

E. マグサルジャブ⁵⁰⁾(モンゴル国狩猟研究会会長)

タルバガンを再導入することによってトウブ県におけるタルバガンの個体数が増加するメリットがある。この事業はいい事例になり得ると考えている。タルバガンの再導入を専門の機関と共同で行ったので、生じるリスクが減るメリットがある。加えて、バヤンホンゴル県の環境所の方から県全体の野生動植物の研究を委託されており⁵¹⁾、生物多様性の分布状況を把握し、野生動物の生息地の状況、特に超希少動物の分布状況を明確にするなどの成果が期待される。バヤンホンゴル県レベルでは、初めてである。

場面 22 (18:17-19:30) [タルバガンの食事についてナレーションによる説明]

タルバガンの食事に関しては、重視しないといけない。医動物学研究所の専門家であるガンフヤグ氏にアドバイスを受け、キャベツ、ニンジンを食べさせていた。カブをあげるのも悪くないことがわかった。食事に関しては、タルバガンは捕獲されてから2日後に食べてくれた。最終的には人間の手から食べるようになった。タルバガンが巣穴から出てくることを考え、1日に朝と晩2回食事をさせていた。そうすると体重も減ることがなかった。このタルバガンの場合は人の目も気にせず食事し始めている。普通に人間を怖がらなくなる。もし、タルバガンが犬のように人懐っこかったら〔ペスト菌を媒介する〕、人間に害をもたらしていたかもしれない。別種類の草をあげてみてもいいかもしれない。

場面 23 (19:31-20:09) [放出地へ向かう途中の様子]

この方はガルート郡⁵²⁾の環境監視員であるガンゾリグ氏だ。仕事を一所懸命する方だった。私たち〔放出地の受託者らが捕獲したタルバガンを輸送する途中〕の車を止め、何者か、どこから何

49) バヤンホンゴル県医動物学研究所の専門家だ。

50) モンゴル生命科学大学、バイオテクノロジー学科の講師で、モンゴル国狩猟研究会会長でもある。

51) 2018年5月3日付き、バヤンホンゴル県財政局長、環境・観光所長、モンゴル国狩猟研究会会長名で契約を結んでいる。契約の主な内容としては、バヤンホンゴル県内の野生動物(狩猟対象者)の分布状況及び個体数を調査し、2018年から2023年の5年間の狩猟マネージメント計画を作成することである。この契約書からは、モンゴル国においては、自然環境、野生動物の保護という視点は重視されない状況にあることが分かる。

52) ガルート郡はバヤンホンゴル県の20郡の1つで、ジャルガラント郡と接している。

匹のタルバガンを捕獲しているかなどを取り調べ、しっかり働いていた。この頃はナーダム祭⁵³⁾だった。ナーダム祭の時はほとんどの人が職場を離れ遊びに行ってしまうのだが、この方はやるべきことをやっていた。一所懸命な人で褒めたく思った。

場面 24 (20:10-21:33) [放出地における様子]

〔放出地の自然環境〕この動画では、デルゲルハーン郡の狩猟解禁地区の様子と生息している野生動物を映しており、バヤンホンゴル県の住民と今回の事業に携わった人々に見せる目的で同郡に着いた直後に撮影したものだ。この地区に生息中の野生動物の一部が映っている。この動画を持って環境保護友好会のメンバーらにその地区に生息している野生動物の分布状況を聞くとどこに何が何匹、何頭いるかをしっかり答えた。これも環境保護友好会は野生動物をちゃんと守っているのか、山に入って状況を確認しているのかがわかる材料になった。この環境保護友好会はわりと聞く耳を持っている。このように常に保護活動を行っている人々には礼金を渡しても悪くないという決断に至った。モウコガゼル、野生ヒツジなどがいた。仔ヒツジを連れた野生ヒツジがいた。本来は群れで移動するのだが、群れを離れてしまったようだった。オスの野生ヒツジの群れが映っている。

場面 25 (21:33-22:52) [タルバガンの放出]

〔ペスト菌検査の結果〕31日に返事を受け取った。29日にタルバガンの検診結果が出たが、31日正式に受け取った。これで書類上の手続きがおわり、再導入する場所に向かった。郡長、環境監視員、環境保護友好会のメンバーらが参加した。郡長は成功することを祈り、ミルクを捧げた⁵⁴⁾。

再導入するエリアに着いて、その端から始めた。郡全体の草の生え具合はよかったですし、放出地として選んだ場所の草の生え具合も悪くなかった。郡の側では大人の手先から肘までの長さぐらいまで埋まっていたタルバガンの巣穴を掘りだし、開けていた。巣穴もすぐ入れる状況だったから、半日で再導入が終わった。

タルバガンは巣穴を掘り直してから中に入ることもあった。巣穴が埋まっていたらすぐ入っていた。

場面 26 (22:52-26:26) [放出地の環境監視員の挨拶]

B. ラブダンビヤンバ⁵⁵⁾（トゥブ県デルゲルハーン郡の環境監視員）

デルゲルハーン郡の面積は21,600ヘクタールである。位置としてはハンガイ山脈のおわりであるデルゲルハーン山、南の方は平野に入る。元々はタルバガンの生息地だった。1999年以降の気候変動が原因で、モンゴル国全体で特に平野地域におけるタルバガンの個体数が減少した。当郡でもタルバガンの個体数が減少し、今では、生息地は点在するほどになっている。タルバガ

53) 本来は全国規模の週休日である。都会から田舎に向かう人々のラッシュが続く時期である。同時に、タルバガンの密猟も多く発生する時期である。

54) モンゴルでは、ミルクやミルクティを（テンゲル（天）やガザル（地）に捧げるといった習慣が日常的に行われている。天や地の神に感謝を表す行為の1つである。

55) 当時の放出地の環境監視員である。2018年に行った調査結果、退職したことが分かった。

ンの繁殖に適した環境を作るため、モンゴル国環境国民委員会、モンゴル国狩獵者協会といったNGO、モンゴル国環境・観光省、生物学研究所に依頼し、トゥブ県デルゲルハーン郡にタルバガンの再導入事業を実施している。モンゴル国狩獵者協会、ゼレグレー社の資金で行われているプロジェクトである。バヤンホンゴル県のジャルガラント郡旧バイドラグ国営農場（1956年設立—1991年閉鎖は、バイドラグ川のほとりを拠点地に草刈、羊の品種改良、種付けの教務を行っていた）から50匹のタルバガンを捕獲し、バヤンホンゴル県の関係者の監視の下でプロジェクトを実施している。デルゲルハーン郡には住民によるデルゲルハーンのノタグという環境保護友好会を2017年の春に設立した。友好会は若者たち、遊牧民から成り立つ。2017年事業としては、トゥブ県ムングンモリト郡のヘルレンアラブト友好会から550本の木の苗をもらい、植えた。さらに、オガルザ・タラムツアグ山脈⁵⁶⁾の狩獵解禁地区の経営計画を担当し、絶滅危惧種となっている野生動物に食事を与えるなどの他、今回のタルバガンの再導入事業を実施している。モンゴル国狩獵者協会、ゼレグレー社は環境保護友好会の能力向上のために、監視研究の仕事に使うバイクを2台、ドイツ製の双眼鏡を寄付していただいた。デルゲルハーンのノタグ環境保護友好会、モンゴル国狩獵者協会、ゼレグレー社、郡役場らの間で契約を交わし、環境保護プロジェクトを実施している。モンゴル生命科学大学の先生⁵⁷⁾、学生によるチームが今回のタルバガンの再導入事業の経過を2年間観察し、研究することになった。この狩獵解禁地区に生息している野生のヒツジ、モウコガゼルその他の野生動物、またタルバガンの放出地地域の草地の足り具合、草の生え具合、野生動物の個体数の調査を共同で実施し、進めている。デルゲルハーンのノタグ環境保護友好会がタルバガンの再導入事業、他の野生動物保護活動に積極的に参加し、地元の環境保護に貢献することを期待する。

場面 27 (26:26-26:58) [関係者による挨拶]

L. メデレー⁵⁸⁾（トゥブ県デルゲルハーン郡のデルゲルハーンのノタグ環境保護友好会の会長）

デルゲルハーンのノタグ環境保護友好会は2017年の春に設立された。遊牧民、住民合わせて18人のメンバーで活動している。郡役場、ゼレグレー社、当友好会が結んだ契約に基づき、タルバガンの再導入事業を行っている。契約通り、再導入されたタルバガンの保護を当友好会が担当する。

場面 28 (26:58-27:43) [放出地の住民との交流]

友好会の実行委員会のメンバーであるバヤルサイハン氏⁵⁹⁾の家を訪問した。彼は皮の紐で様々なものを作る。私たちに作品をプレゼントしてくれた。彼の本業の1つであり、皮の紐を使用する馬乳酒の入れ物、伝統的な皮の紐グッズなどを作る。

ゼレグレー社⁶⁰⁾の社長のバヤルマグナイ氏がバイク、双眼鏡を友好会に渡している。その他、郡役所宛てに言い換えれば環境監視員に1台のバイクを渡した。

56) 注39を参照。

57) 注4を参照。

58) 放出地の遊牧民である。

59) 同上。

60) 注6を参照。

場面 29 (27:43-28:14) [放出地及び受託者のかかわり]

今年受け取った500本の木の苗を植樹したのを見せた。[モンゴル国環境市民委員会から捕獲地の郡役場に] 2010年にも苗をあげたことがある。その木が今こんなに大きくなっている。郡役所の前に植えていた。立派な木になっていた。もらった物を大事にしそうな人々だった。

場面 30 (28:14-29:30) [放出地の郡長による挨拶]

D. ジャルガルマー⁶¹⁾ (トウブ県デルゲルハーン郡長)

2002年に当郡では干ばつが起こり、タルバガンの個体数が圧倒的に減った。2016年から2020年の郡長事業計画には50匹のタルバガンを再導入すると記入している。その実施に当たってモンゴル国環境・観光省の他、関連する機関に依頼した。依頼が通り本日タルバガンの再導入事業が実施され、50匹のタルバガンを再導入した。このプロジェクトの実施を応援してくれた環境・観光省の環境資源管理署(所長ニヤムダワー)の皆さん、国立医動物学研究所の皆さん、バヤンホンゴル県のジャルガラント郡長のサインビレグさん、郡役場の皆さん、バヤンホンゴル県の医動物学研究所の皆さん、トウブ県環境・観光所のみなさん、協力して下さったすべての人々にデルゲルハーン郡の住民を代表して感謝を申し上げる。

場面 31 (29:31-30:21) [ナレーションによるまとめ]

デルゲルハーン郡長は私たちにも感謝を伝えた。今回の事業のまとめをラブダンビヤンバ氏[放出地の環境監視員]が紹介している。彼は行動を共にしたので、この事業の全体を把握している。感謝の気持ちを表して銀の杯に入れたミルクをくれた。私たちも感謝している。タルバガンの再導入事業を行おうと決め、地元に鳴くタルバガンを増やそうしていることは彼らの考え方の正しさを表していると考えられる。今後各郡がこのような事業を自発的に実施したらと思った。

場面 32 (30:21-31:07) 関係者、登場人物の情報

本文中に登場した関係者らの情報(名前、所属)になるため、ここで、省略する。

4. タルバガンの再導入とその後

放出地と捕獲地の間で交わした契約には、タルバガンを再導入してから1年後に放出地から捕獲地へモニタリング報告書を提出することになっている(バヤンホンゴル県医動物学研究所による)。しかし、放出地に関しては、再導入後のモニタリング報告書を捕獲地に提出していない状況である⁶²⁾(2021年9月時点)。

また、捕獲地及び放出地の人々はタルバガンの再導入を行う際に一時期的に盛り上がって、時間が経つに連れ、興味関心を持たなくなることも見受けられる。その一例を挙げれば、捕獲地では住民に

61) トウブ県デルゲルハーン郡長(2016年～)で、現在2期目を務めている。

62) 筆者によるインタビュー調査(ジャルガラント郡環境監視員T氏)：2021年9月20日オンラインにて。

によるタルバガン保護友好会を設立し、最初の活動として国道、県道などの大きな道沿いに看板⁶³⁾を立てるという話だったが、2021年9月時点では、タルバガン保護友好会の設立に至っていない状況である。

放出地の受託者であるゼレグレー社の関係者によると2019年に行ったモニタリングの結果、再導入した50匹のタルバガンが200匹になったという⁶⁴⁾。その後は、モニタリングをしていないという。しかし、その情報は捕獲地に伝わっておらず、ジャルガラント郡の環境監視員は「あの後どうなったか分からぬ、連絡がない⁶⁵⁾」という不満を抱えていることが分かった。

再導入について、生態学的にタルバガンの個体数の増加が評価ポイントになるのは重要であるものの、タルバガンと人々の地域や文化的関わり、さらに住民間の感情等が全く考慮されていないというギャップが存在していることも分かってきた。具体的には、捕獲地の関係者は、タルバガンを連れて行かれたという被害者意識が強く、気持ちがすっきりしないままに時間が経っていることが見えてきた。よって、タルバガンの再導入は人間との共生を図るという先進的な取り組みである一方で、結果としてタルバガンを受け渡す行為だけに満足してしまうという、形式的な事業になっている懸念が浮かび上がってきた。

5. おわりに

本稿は、タルバガンの再導入の映像資料を取り上げると共に、関係者の間で交わされた公文書などを補足資料としてタルバガンの再導入の実態を明らかにすることを目的とした。

タルバガンの再導入について、国の試みは先進的であったが、その運営ぶりは望ましいものだとは言えず、結果としてタルバガンを受け渡す行為だけに満足してしまうという、形式的な事業になつてはいる懸念される。映像資料を通じて再導入事業をめぐる様々な問題が確認できる。例えば、①タルバガンの縄張り及び1つの巣穴を共有するグループ構成を配慮せずに捕獲する、②タルバガンの繁殖に適さない区域（狩猟解禁地区）に放す、③捕獲地及び放出地の住民の理解・協力の不足、④捕獲地と放出地の関係者をめぐる複雑な関係が生じるといった問題も伺われる。

タルバガンの再導入は国民を巻き込む形で、よりタルバガンのことを考えさせようとするものだが、自治体間の複雑な関係が生じたり、互いに不満、反感を持つ中で持続性のある事業に繋げていくためには、それぞれの関係者の思惑を明確にする必要があると考えられる。この点を掘り下げていくには、関係者との対話を重ねていく必要があると考え、今後の課題にしたい。

引用資料

〈モンゴル語〉

[映像資料]

Монголын мэргэжлийн анчдын холбоо, Монголын агнуур судлалын нийгэмлэг, Хангал студи (2017). *Tarvaga*

63) タルバガンの狩猟禁止に関する内容という。

64) 筆者によるインタビュー調査（ゼレグレー社の関係者 M 氏）：2021年9月21日オンラインにて）

65) 注62を参照。

сэргээн нутагшуулсан ажлын тайлан. УБ. (「タルバガンの再導入事業の報告」MP4 ファイル)

[公文書等]

Төв аймгийн Дэлгэрхaan сумын засаг дарга № 01/194 (2017). Зэрэглээ ХХК-д хүргүүлсэн хүсэлт. 2017 он 3 сарын 29. Дэлгэрхaan сум. (トウブ県デルゲルハーン郡長からゼレゲレー社宛ての申請書)

Зэрэглээ ХХК захирал № А/08 (2017). Монголын мэргэжлийн анчдын холбоонд хүргүүлсэн хүсэлт. 2017 он 4 сарын 3. УБ. (ゼレゲレー社長からモンゴル国狩獵者協会宛ての申請書)

Монголын мэргэжлийн анчдын холбооны тэргүүн № А/24 (2017). Баянхонгор аймгийн зоонозын өвчин судлалын төвлөрөх хүргүүлсэн хүсэлт. 2017 он 5 сарын 9. УБ. (モンゴル国狩獵者協会長からバヤンホンゴル県医動物学研究所宛ての申請書)

Монголын мэргэжлийн анчдын холбооны тэргүүн № А/25 (2017). Баянхонгор аймгийн Жаргалант сумын засаг даргад хүргүүлсэн хүсэлт. 2017 он 5 сарын 11. УБ. (モンゴル国狩獵者協会長からバヤンホンゴル県ジアルガント郡長宛ての申請書)

Баянхонгор аймгийн Жаргалант сумын засаг дарга № 1а/80 (2017). Төв аймгийн Дэлгэрхaan сумын засаг даргад хүргүүлсэн албан бичиг. 2017 он 6 сарын 7. Жаргалант сум. (バヤンホンゴル県ジアルガント郡長からトウブ県デルゲルハーン郡長宛ての回答)

Монгол Улсын Байгаль Орчин, Аялал Жуулчлалын яам Хүрээлэн буй орчин, байгалийн нөөцийн удирдлагын газрын дарга № 06/4152 (2017). Агуулур судлалын нийгэмлэг ТББ-д хүргүүлсэн албан бичиг. 2017 он 7 сарын 3. УБ. (モンゴル国環境・観光省周辺環境自然資源管理署長からモンゴル国狩獵研究会宛ての許可書)

[その他]

Адъяа. Я (2000). Монгол тарвагаа биологи, экологи, хамгаалал, аж ахуйн холбогдол УБ: Admon хэвлэлийн газар.

Emma L. Clark, Мөнхбат. Ж (2006). Монгол улсын хохтөн амьтны Улаан данс. УБ: Admon хэвлэлийн газар.

Улсын их хурлын тогтоол дугаар 03 (2005). Байгаль орчны талаар авах зарим арга хэмжээний тухай. УБ: Төрийн ордон.

Гэрэл. Д (2017). Гөрөөчин хүн бол байгаль, ан амьтан хамгаалагч юм. Mecc.mn: <http://mecc.mn/?p=402> (閲覧 2019.06.21)

〈日本語〉

大黒俊哉、吉原佑、佐々木雄大(2015)『草原生態学 生物多様性と生態系機能』東京大学出版会。

ジアルガルサイハン・ラマー(2018)「モンゴル国における放牧地の生物多様性の保全活動に関する研究—タルバガの保全的移植の事例を通して—」『モンゴル研究』創刊30号記念号：56-64. 大阪。

(じゅるがるさいはん らまー)